

書評 仁木宏著『空間・公・共同体——中世都市から近世都市へ——』 塚田 孝

はじめに

仁木氏は、これまで中世都市、具体的には①京都、②大坂（石山）寺内町、③大崎を対象に実証的研究を積み上げてきた。これらをベースに、現在の研究動向を総括しながら、中世後期の都市の発展から近世都市の成立を展望したのが本書『空間・公・共同体』である。ここでは、各論点について著者の力点の置き方とは異なるかもしれないが、筆者なりの読み方で内容をまとめて、書評にかえたい。

1 章立て

『空間・公・共同体』は、序章・I章で、研究動向を整理して、研究視角を提示する。一九八〇年代からの中世都市史研究の特徴として建築史、考古学などの都市空間に注目した研究の発展がある。しかし、往々にしてそれは、当該期の社会構造との関連を問わないと言う欠陥を持っているとして、両者の統一的な把握をめざす視角を提示する。書名の『空間・公・共同体』には、この視角にこめた意図が表現されている。すなわち、『共同体』は、社会構造のをなす中核の〈町—惣

町〉という都市共同体を表しており、それらが領主権力を含めて、都市〈空間〉において重層的な〈公〉をなしているという関係を表現している。そして以下、本論が続く。II章の「多元と交錯」では、前提としての中世都市の本質的特徴を指摘し、III章「都市民の志向—京都—」において平安京以来の伝統を持つ京都においてどのように都市共同体が展開してくるか、それに対応した都市支配がどのように成立するかを明らかにし、IV章の「仏法から公儀へ—寺内町—」では、大坂（石山）寺内町を中心にその周辺の摂河泉に展開する寺内町の大坂並体制の意義と限界について述べ、V章「都市の平和—城下町—」において、各地の守護館から守護城下町・戦国期城下町・織豊系城下町への展開を跡付け、織豊統一政権によって京都の都市改造、寺内町の圧服により、多元・交錯の中世都市から一元・統合の近世都市への転換が達成されると見通す。以上のような構成となっているが、自らの実証研究がベースにあり、それをさらに発展させたII—IV章は精彩があり、オリジナルな見解が各所に見られる。

2 II章—中世都市の特質

II章では、中世都市を次のように特徴づける。中世京都では、土地

領主、座の本所、人的支配関係における主人という三つの性格をもった公家・寺社・武家などの都市領主が多数存在した。一人の都市民が、土地・生業・人の関係で、それぞれ別の都市領主の支配を受けることが普通で、都市領主は一元的な支配を実現してはいなかった。また、空間的にも旧平安京域に上京・下京や洛外の寺社門前が「島」のように浮かぶような状況であった。こうして中世京都は多元的で交錯した空間・社会構造と特質づけられる。これは、地方の政治都市・港津・宿市でも共通する特徴であったとする。

3 Ⅲ章—京都の都市共同体

これに続いて、Ⅲ章の京都については、土地・生業（商工業）・人の三側面に規制力を及ぼす町共同体が一五三〇年代に登場してくること、室町幕府もこの町共同体に依存した支配を行わざるをえず、以後、京都を支配した三好政権、織田政権とその方向性を強め、豊臣政権に至り都市共同体に一元的に対峙する支配の在り方を完成させたとする。ここでの注目すべき論点として、以下の諸点があげられよう。

○一五世紀から一六世紀初頭までに見られる上京・下京のまとまりは、土倉・酒屋などの有徳人による不定型で非恒常的なネットワークに支えられたものであった。

○町共同体の運営の主体は、有徳人とは位相の異なる町人たちで、彼らは相互の平準性を本位とした。

○町という地縁的共同体は比較的狭隘な洛外寺社門前では一五世紀に見られ始め、都市構造がより錯雑としていた洛中よりも先行した。洛中では、有徳人らに主導された天文法華一揆後の都市収縮による都市空間の稠密化を引き金として町共同体が形成される。

○町・町組・惣町という重層的な都市構造は下から組み上がって行つたのではなく、有徳人層と町人層という異なる担い手によって別個に創り出されつつあった上京・下京などの惣町と町共同体がある段階で統合されたものであり、間におかれた町組はさらに後に遅れてできたものである。

○三好政権以後の京都を支配した権力が、都市共同体に依拠した支配を行なったのは、外から入ってきたため旧来の都市領主の支配を排除しやすかったことがひとつあったが、武士の非分・狼藉の排除を求め、生活と経営の安定を求める町人たちの志向に応えねば安定的支配ができなかったからである。

○これを最終的に達成したのは豊臣政権であるが、それは聚楽第を中心にしてその周りに大名屋敷、さらに聚楽町・上京・下京を同心円的に編成し、それらを御土居で囲い込む形に京都を改造した。それは言い換えれば、京都を城下町に改造したことを意味する。しかし、これは強権的な支配の貫徹を意味するわけではなく、都市民の求める都市の平和（御土居はその象徴）を実現する公儀としての支配の確立を意味した。

4 IV章―寺内町

IV章における寺内町の分析では、個別の寺内町の内部構造を見ると同時に、寺内町どうしのネットワーク、さらにはそれらがおかれた地域の政治社会状況の中で捉えようという、これまでになかった視角を打ち出している。

天文法華一揆によって山科を追われて本願寺が大坂に移り、一向宗勢力の首都ともいべき大坂寺内町の位置が確立する。本願寺は寺内町の町人たちの志向に沿う形で、幕府や摂津守護などから徳政免除や所質禁止などの都市特権を確保していった。さらに関銭減額、交通路の安全確保などに努力し、戦国大名領国内を貫通する独自の〈本願寺系交通路〉を創出した。これによって、各地の寺内町は緊密に結び付き、大坂寺内町が獲得した都市特権は大坂並ということで富田林などの寺内町にも及ぼされた。これは、さらに富田林・大ヶ塚並と言うことで周辺のより小さな寺内集落へと広がって行った。しかし、一面で本願寺は、権門寺院としての中世的領主の側面をもち、その境界が寺内町の都市民の志向との齟齬を生んだ。そのため信長と大坂本願寺の二一年に及ぶ「石山合戦」に際し、摂河泉の寺内町のなかには信長方につくものも多かったのである。それはかつて寺内町に確保された都市特権を社会全体に普遍化しようとする織田政権の前に、本願寺の「寺の論理」では対抗できなかったこと意味し、そこに大坂本願寺・一向一揆の敗北の必然性を見ている。寺内町について、そこに暮らす都市民の立場からその到達点と限界を見極めていえるものと言えよう。

5 V章―城下町

V章では、様々な先行研究を参照して、守護城下町から戦国期城下町、そして織豊系城下町への展開を、次の二点を指標として整理する。すなわち、①多元的な空間構成から、中心の城郭から惣構えに至る一元の同心円的空間構成がどこまで達成されたか、②またそれと照応する武士、寺社、町人の明確な身分的分離が達成されたか、である。

おわりに

本書は、これまで実証研究を積み上げてきた仁木氏の現時点における中世都市研究の総括である。ただ、近世史を勉強する筆者の視点からは、若干気にかかる点もある。中世都市との比較とはいえ、簡単に近世都市を一元・統合と言ってよいのか。「都市共同体」・「都市民」がやや一般的にすぎ、その具体的存在形態が見えにくい。おそらく中世において、そうしたことが見える史料が乏しいということであろうが、そうであればなおのこと、「都市共同体」・「都市民」の具体的存在形態に迫るための方法的な模索が必要なのではなからうか。また、否定型の論理展開もやや気になるが、本書が中世都市研究の到達点を表していることは間違いなく、今後の出発点となる一冊である。

(一九九七年五月刊、青木書店、二五六頁四六版、二二〇〇円)